

再録 — 『月刊みんぱく』創刊のことば 梅棹忠夫

うめさおただお

今号の特集では、去る七月に逝去された梅棹忠夫初代館長が民博に託した思いを振り返る。

表紙に掲げたのは、一九七五年頃、梅棹さんが、館員に向けての民博の理念を

ホテルのバーでメモ書きしたコースター裏と、後にそれを推敲した原稿用紙。

理念のひとつに挙げられている市民感覚を大切に思う思いが、本誌の創刊につながった。

そのねらいは、ここに再録した一九七七年〇月五日刊行の創刊号冒頭に示されている。

ここに『月刊みんぱく』の創刊号をおとどけする。

「みんぱく」とは何のことかと、一瞬不審の念をもたれた方もあろうかとおもつ。「みんぱく」は「民博」である。

国立民族学博物館の略称ないしは愛称である。そしてこの『月刊みんぱく』はその国立民族学博物館の広報誌である。「みんぱく」というよび方は、すでに一般に定着しているとはいいがたいが、この博物館を少ししめる存在と

みていただくために、あえて四角ばらぬ愛称「みんぱく」を、この雑誌の名に採用したのである。

「みんぱく」つまり国立民族学博物館は、この秋に開館を

予定されているあたらしい博物館である。大阪府吹田市千里の日本万国博覧会記念公園のなかに、現在建設中である。まもなくできあがって、十一月十七日から一般に公開される。

民族学（文化人類学）というのは、世界の諸民族の社会と文化を研究する学問である。したがって民族学博物館というのは、世界の諸民族の社会と文化に関する資料を収集、保管、展示する博物館である。ヨーロッパやアメリカでは、この種の博物館はむかしから各地に存在するが、日本にはいままでひとつもなかった。民族学関係者たちの四〇年来の悲願がようやく実をむすんで、こんど、この国立民族学博物館の開設が実現することになったのである。

現代の世界は、かつてない国際化の時代をむかえて、諸民族間の接触と交流はますます活発になろうとしている。

民族間の接触と交流はますます活発になろうとしている。

その思いを振り返る。

そういう時代にあつては、国民の一人ひとり、世界の諸民族の社会と文化についての、具体的に正確な認識をも

つことが、きわめて必要となつてきている。国立民族学博物館は、まさにそのためにつくられたものである。それは、国際理解のための、世界にむかつてひろく文化の窓である。

国立民族学博物館は、このように、市民の教養のための施設であるが、いつぼうでは、国立大学共同利用機関とよばれるところの研究機関のひとつである。それは、いかめしく「国立」の字を冠し、また「民族学」と学問の名を名のつている。市民の一般的な感覚からは、日常生活には縁どおい存在と感じられて、敬遠されるおそれがないではない。それだけに、われわれ関係者としては、この施設を市民に身ぢかなものとしてしたしんでもらうために、できるかぎりの活発な広報努力をはらうべきである。

この小雑誌も、そのような自戒的努力のひとつとかがえていただきたい。

ささやかなひとつの施設にも、しつていただきたいこと、みてもらいたいものがすくなくない。また、ときどきのニュースもある。この雑誌は、この博物館をひろく紹介するとともに、刻々のうごきの情報をみなさんにおとどけするものである。この小雑誌が、市民のみなさんにこの博物館に関心をもつていただき、いっそう有効にそれを利用していただくためのきつかけになることができれば、わたしどものよろこび、これにすぎるものはない。

1 再録
『月刊みんぱく』創刊のことば 梅棹 忠夫

特集 梅棹忠夫とみんぱく

- 3 たえざるイノベーション 中牧 弘允
- 4 みんぱくの研究理念 中牧 弘允
- 5 博物館の思想 久保 正敏
- 7 梅棹忠夫の言語ポリシー 庄司 博史
- 8 市民と博物館 朝倉 敏夫
- 10 研究フォーラム
科学映像をめぐるフォーラム
総研大レクチャー「科学映像の制作理論と制作」
大森 康宏

- 12 みんぱく Information
- 14 地球ミュージアム紀行
告発する博物館——水俣病歴史考証館 平井 京之介
- 15 みんぱく 私の逸品
ファイアの羽根 ビーター・マシウス
- 16 散策と思索の径
博物館と「さわる」 小山 修三
- 18 多文化をささえる人びと
多文化の街の多言語メディア——ニューコム 中野 克彦
- 20 歳時世相編
イタリヤの「熱い秋」 宇田川 妙子
- 22 フィールドで考える
「出張」にでかける地方の神さま 竹村 嘉晃
- 24 次号予告・編集後記

月刊
みんぱく

10月号目次